

誰もが安心して通える学校にするために 教職員が信頼して相談し支え合って 子どもの気持ちに寄り添うことを求める請願

【請願要旨】

1. 本請願の目的

町田市は全国や東京都と同じように不登校が増えています。これは子どもの命に係わる重大問題だと考えます。

2020年に発生した小学生の自死事件の再発を防止するため、「町田市いじめ問題調査委員会」が答申した「再調査報告書」の提言に記されている「誰もが安心して通える学校」を実現することが必要であり、そのために次の提言内容が大切です。

①教員1人1人が、児童らと信頼関係を築くこと

②教員が管理職も含めて、お互いを信頼して相談しあい情報を共有し、対応できること

これらの提言内容を実現するためには、教育委員会がすでに実施している対策に加えて、以下の二つのポイントが不可欠だと考えます。

①教職員がお互いに信頼して相談し支え合って、ありのままの子どもの気持ちを理解し、子どもに寄り添って一緒に考える姿勢で子どもと対話できる環境をつくること

②それを実現するために、すべての教職員どうしが本音で子どもに関する意見を交換できる環境をつくること

私は、この二つのポイントが本町田小学校で実現できていたと考えます。そして、本町田小学校の校長は次のように述べています。

「本町田小学校は、子どもたちを力で抑えつけるのではなく、子どもと教員、子ども同士、教員同士が敬意を持って、人間らしい関係を築くことを大切にしてきました。子どもたちは自分の力で育って行きますので、学校の主役は子どもです。教員はそれを助けるためにいます。」

この本町田小学校の取り組みだけでなく、町田市内の小中学校の様々な取り組みを共有して参考にしながら、この二つのポイントを実践し、誰もが安心して通える学校が実現できれば、全国に先駆けて町田市の不登校の増加を抑え、減少させることができると信じています。

是非、教育委員会のみならず各学校の教職員、そして、私たち市民が協力して、誰もが安心して通える学校を実現したいと考えます。

そのために、本請願の採択をよろしくお願いいたします。

2. これまでに分かっていることと教育委員会の対策

ここでは、2025年6月の町田市議会に提出した請願第12号の概要、新たに調べた2019年に日本財団が行った自殺意識調査の結果と2020年に文部科学省が行なった不登校の実態調査の報告書についての考察、そして、東京都を含めた全国と町田市の不登校数の比較、最後に、請願第12号の審議の中で述べられた教育委員会の不登校対策について記します。

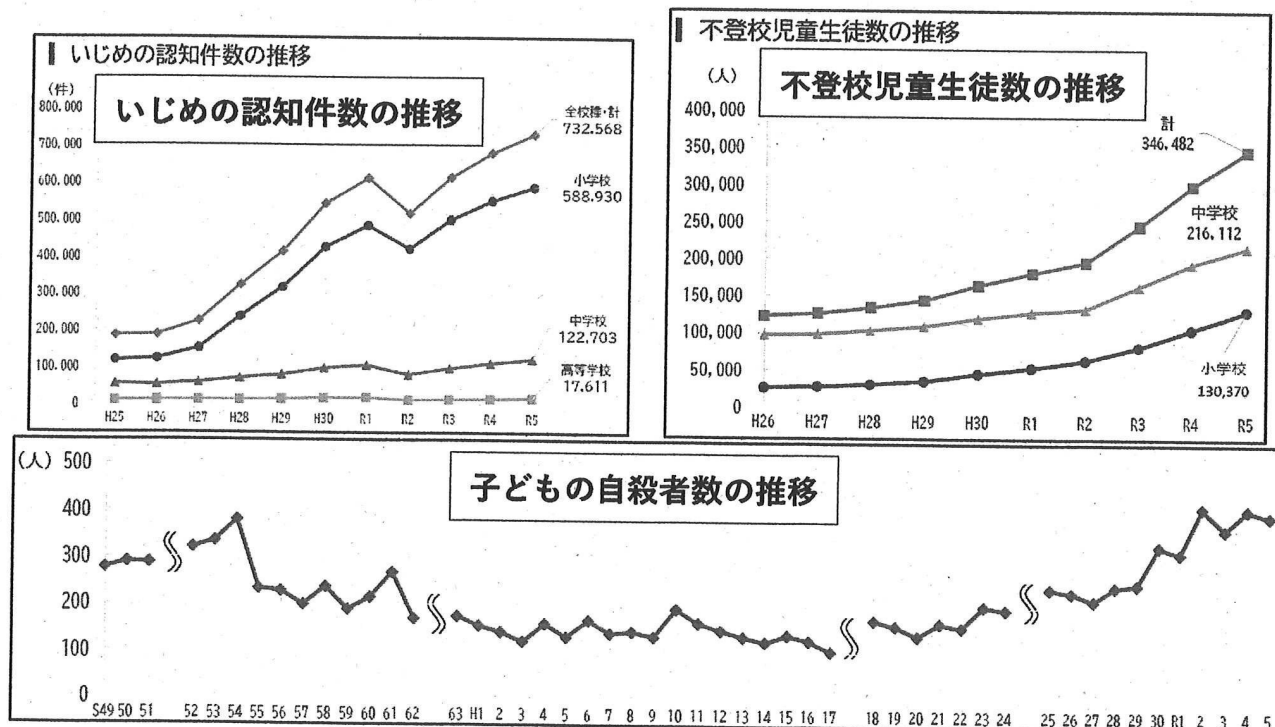
2. 1 請願第12号の概要

2025年6月の町田市議会に提出した請願第12号に次のことを記しました。

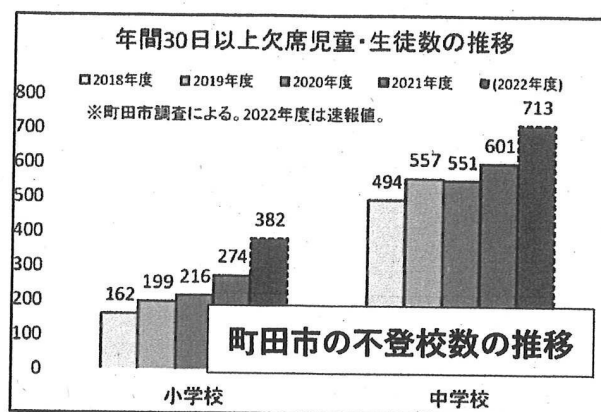
- (1) 2020年11月30日に起きた町田市内の小学生の自死事件の再発を防止するため、2024年2月21日に「町田市いじめ問題調査委員会」は「再調査報告書」(以下、報告書と略記 資料1)を答申した。その報告書の提言には、子どもの命を守るために次の3点が大切であることが記載されていた。

- ①誰もが安心して通える学級・学校づくり
- ②教員1人1人が、児童らと信頼関係を築くこと
- ③教員が管理職も含めて、お互いを信頼して相談しあい情報を共有し、対応できること

- (2) 2024年10月に文部科学省から報告された調査結果(資料2 p.8 p.23 p.37)によると、いじめの認知件数や不登校児童数と同じように、子どもの自殺者数が近年、増加している。



(3) 町田市でも不登校数が全国と同じように急激に増えている。(資料3 p.19)



2. 2 不登校と自殺の関係

日本財団は、2019年3月に日本財団いのち支える自殺対策プロジェクト『日本財団 第3回 自殺意識調査』報告書(資料4)を公表しました。この調査は、18歳から22歳までの全国3126人の若年層を対象に補充調査を行なっています。その調査結果が記されたp.40の8行目以降、不登校が「他の要因を統制しても自殺念慮や未遂行動と比較的強い関連がある」と記し、さらに「自殺予防の観点からは、不登校状態になっている生徒・学生に対して、より積極的な介入などを行うことで、危険性を少しでも低減していくことが必要であると考えられる」と記しています。

これは例えば、p.37に掲載されている下記グラフにおいて、不登校の項目で自殺未遂をした人の内、不登校の経験がある人は、不登校の経験がない人の2%に比べて、21%と10倍以上も高い確率であることから分かります。

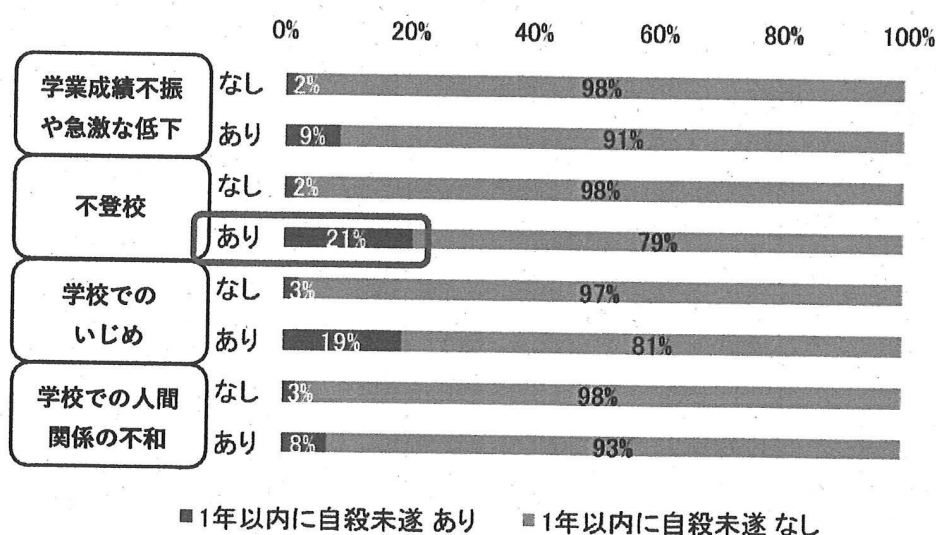


図 2-1-45: 1年以内の学校関連の経験と1年以内の自殺未遂の有無

したがって、町田市における不登校児童・生徒数の増加は、子どもの命に関わる重大な

事態であることが分かり、効果のある不登校対策の実施が緊急に求められています。

2. 3 不登校実態調査から分かること

この不登校のきっかけを知る上で、2020 年に文部科学省が行なった不登校の実態調査の報告書が参考になります。報告書の p.10 と p.11 に「最初に行きづらいつ感じ始めたきっかけ」について、小学生と中学生が当てはまる項目を複数回答した結果がグラフにまとめられています。

小学生と中学生のどちらの場合も、きっかけとなった 21 項目の内、回答率が 20%を超えた項目が同じく 7 項目あります。この 7 項目の内、次の 3 項目は二次的に生じたものと考えられます。

- ①身体の不調（学校に行こうとするとおなかが痛くなったなど）
- ②生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）
- ③きっかけが何か自分でもよくわからない

一方、一次的な真の原因は次の 4 項目にあると考えられます。

- ④友達のこと（いやがらせやいじめがあった）
- ⑤友達のこと（④以外）
- ⑥先生のこと（先生と合わなかった、先生が怖かった、体罰があったなど）
- ⑦勉強が分からない（授業がおもしろくなかった、成績がよくなかった、テストの点がよくなかったなど）

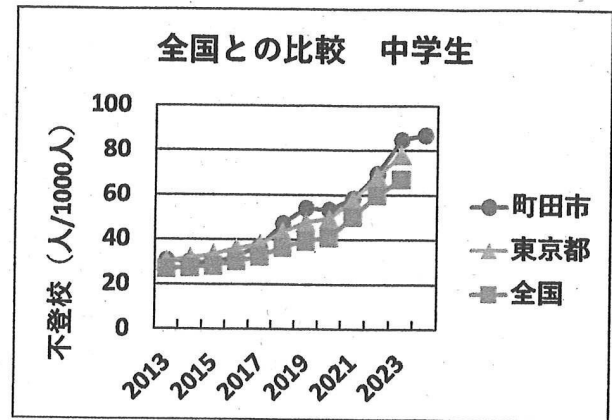
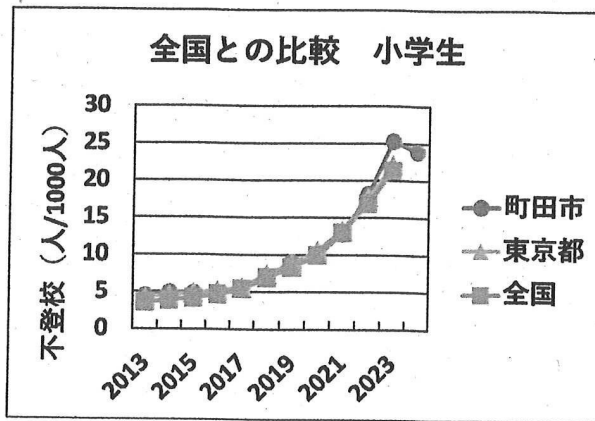
これらの問題は何れも、教員がありのままの子どもを理解し、一緒に考える姿勢で、本音で子どもと対話することで、ある程度、解決できると考えます。特に、「先生と合わなかった、先生が怖かった、体罰があったなど」については、教員同士がお互いに信頼して相談し、複数人で協力して対応することで解決できると考えます。

2. 4 町田市の不登校の推移

2025 年 6 月の町田市議会に提出した請願第 12 号に掲載した町田市と全国の不登校を比較したグラフに東京都と 2024 年度の町田市の実績を加えたグラフを下に貼り付けます。

このグラフは、2013 年度から 2024 年度までの不登校になった小学生と中学生が 1000 人あたりの何人いるかの推移を全国と東京都、町田市についてプロットしたものです。

（資料 2 の詳細版、東京都教育委員会資料、町田の教育、町田市統計書、令和 7 年 6 月 9 日本会議議事録のデータを使用）**小学生は全国平均と同様に増加し、中学生は全国平均よりも多くなっている**ことが分かります。これは、子どもたちの命を守る上で、町田市も全国と同様に深刻な状況になっていることを示しています。



2. 5 教育委員会の対策

子どもの命を守るための対策として、「再調査報告書」は提言の第一に「誰もが安心して通える学級・学校づくり」を掲げ、その実現のために「教員1人1人が、児童らと信頼関係を築くこと」が大切だとしています。

2025年6月16日の文教社会常任委員会で学校教育部長は、この報告書を受けて、いじめの未然防止と不登校の対策として次の対策を実施していることを述べられました。

(1) いじめの未然防止対策（2022年度から）

- ①心理検査ハイパーQUの実施、いじめに関する授業の実施
- ②子どもたちへの相談窓口の周知
- ③学校内にいじめ対応チームを結成、年3回以上の研修の実施

(2) 不登校対策（2024年度から）

- ④教育支援センターの小山分室、分教室の開設、オンライン支援の開始
- ⑤不登校の保護者のつどいの開催
- ⑥不登校対応巡回教員の配置と増員

また、「町田の教育 2024」（資料5）p.142の2020年4月に次の記載があります。

⑦スクールカウンセラーを市費にて新たに任用開始

これらの対策の結果、2024年度の不登校数の増加率が少し減少しているのだと思われます。しかし、不登校の増加を止めるためには、より抜本的な対策が必要だと考えます。

これらの対策の中で子どもとの信頼関係を築くためには「⑥不登校対応巡回教員」と「⑦スクールカウンセラー」の配置が有効と考えられます。しかし、一つの学校に対して1週間に1回のみの配置では、子どもとの信頼関係を築くことは困難と考えられます。

3. 本町田小学校の取り組み

本町田小学校は2002年4月の学校統合後から2025年3月に廃校になるまで、歴代の校長の努力により、誰もが安心して通える学校づくりが行なわれてきました。その結果、困っている子を見かけたら自然に声をかける雰囲気形成され、本町田小学校創立20周年記念誌のp.2で校長が記している通り、「卒業生や在校生が・・・「ふるさと」と慕い、

保護者から「大家族のような理想の学校」と言われるような学校になりました。

初代校長は、学校統合に伴う子どもたちの荒れを収めるために尽力されました。以下に、その後の校長の取り組みの内容を記します。これらは、地域ボランティアの方々からの話と校長の著書（資料6）とインターネット記事（資料7）を参考にしました。

3. 1 地域との協働

校長は地域住民の協力を得る努力をしてきました。その目的の一つは、子どもたちに温かい人間関係を体験してもらうことです。

戦後、核家族化が進み、両親以外の祖父母や叔父叔母などと一緒に生活することがなくなりました。また、生まれ故郷を離れて生活することが多くなり、近所に親戚がいる環境も少なくなりました。さらに、都市部では近所付き合いが少なくなりました。加えて、詐欺を目的とした電話や訪問による強盗や、通り魔殺人などが増え、他人を信頼できなくなってきました。この結果、子どもたちの回りの人のつながりが薄くなり、温かい人間関係を体験する機会が大変少なくなっている状況があります。

この状況を少しでも改善するため、小学校で温かい人間関係を体験できる場を提供できるように、保護者や地域住民が学校教育に関われる工夫を行ってきました。それが、コミュニティースクールという形になりました。

3. 2 校長の取り組み

校長は地域との協働を進めると共に、子どもたちとの対話による信頼関係の構築に注力しました。

まず、校長は子どもたちとの接点を持つために、校長室に小さな生き物やゲームを準備しました。これにより、校長室は休み時間になると子どもたちで一杯になります。1年生の女の子たちは代わる代わるハムスターを両手でそっと持ち上げます。2年生や3年生の子どもたちはセキセイインコを手に乗せて話しかけます。クワガタやカブトムシのつかみ方を下級生に教える子もいます。黒ひげの人形が飛び出すゲームや、大きなワニにかみつかるゲームが置いてあり、違う学年の子どもたちが一緒に楽しんでいます。そういう校長室はにぎやかな校庭に行けない子どもの居場所にもなっています。

また、授業中に友だちと喧嘩してしまう子は、校長室に来て、手乗りインコを指に乗せたり、ハムスターをそっと抱っこすることで、イライラが収まり、安らぐことができます。そして、教室でイライラすると自分から校長室に来るようになりました。1時間目にいつも遅刻して来る子どもは、校長室でパズルをすることで、気持ちがすっきりします。そして、迎えに来てくれた友だちと一緒に教室に行けるようになります。正門で開門を待っている子どもは、教室に行くことが苦手でした。しかし、毎朝、校長室で朝御飯を校長と一緒に食べるようになると、家で飼っていたハムスターが2週間で死んでしまったことを話すことで、校長室でハムスターを飼うことになりました。そして、校長室に遊びに来る友

だちとの時間が楽しくなり、教室にまっすぐ行けるようになりました。

校長は、これらの子どもたちとの触れ合いの中で、対話をし、信頼関係を築いてきました。

3. 3 校長を中心にした教員の取り組み

学校全体では下記の取り組みが行なわれました。

(1) 主体的な学びのために

- ・毎朝：陰山メソッドによる音読と 100 ます計算の習慣化
- ・毎週：希望する子どもたちが放課後、教員や学生・地域ボランティアの協力の下に算数プリントに取り組む
- ・毎週：子どもたち一人一人に寄り添った指導や補習を放課後に行なう

(2) 思いやりのある子どものために

- ・学級や学年を越えて、教員による見守りと声かけを行なう
- ・不登校傾向や登下校時に問題の起こりやすい子どもに最優先に寄り添う
- ・学年の子ども全体を学年の教員みんなで育てる

(3) 心身の健康のために

- ・早寝、早起き、朝ごはん、歯磨きの取り組み
- ・おいしい給食の実施と食育による生命尊重

これらの取り組みを行なうために、教員の方々は下記の努力を行ないました。

- ・学年毎に学年の教員みんなで子どもたちの顔と名前を覚える
- ・学年毎の打合せの日常化により情報を共有し、各教員の弱いところを支え合う
- ・子どもの問題はその背景の理解に努め、いつも複数の教員であたる
- ・登校時、休み時間、清掃時などで担任のいない時間を作らない
- ・特別支援教育担当の教員から専門知識を学び、子どもの特性に合わせた指導を行なう
- ・すべての教員が子どもたちの観察を細やかに行い、理解に努める

これらの努力によって、教員同士が助け合い、支え合う関係を大切にしています。

3. 4 地域の方々の取り組み

子どもたちの教育を充実させ、子どもたちに信頼できる大人がいること実感してもらうため、保護者や地域ボランティアと下記のような連携を行ないました。

- ・算数ステップアップ教室：毎週放課後に希望する子どもたちが算数プリントに取り組む際に、地域ボランティアが分からないところを教える。毎回、1 年生から 6 年生まで 100 人くらい参加。
- ・サマースクール：夏休み前半に地域の方々が先生になって、着付け、カルメ焼き、百人一首、古代エジプト文字教室や、卓球、サッカーなどのスポーツ教室などの 54 講

座を開校し、延べ1200人程度の子どもたちが参加。(2014年度)

- ・昔遊び教室：2年生の授業として、地域の方々が子どもたちに、剣玉、コマ回し、あやとりのやり方を教える。子どもたちはできるようになると嬉しそう。
- ・家庭科教室支援：ミシンの操作などの危険が伴う実習で地域の方々が手伝う。
- ・ありがとうの会：1年生から6年生の子どもたちが教育ボランティアの方々を招待して、感謝の気持ちを歌や演奏で表現する。
- ・これらの取り組みによって、子ども、保護者、地域住民の間に顔や名前の分かる人間関係を作る。

3. 5 取り組みのまとめ

繰り返しになりますが、校長は次のように述べています。

「本町田小学校は、子どもたちを力で抑えつけるのではなく、子どもと教員、子ども同士、教員同士が敬意を持って、人間らしい関係を築くことを大切にしてきました。子どもたちは自分の力で育って行きますので、学校の主役は子どもです。教員はそれを助けるためにいます。」

そのためには、教職員が相互に支え合って、子どもを良く観察し、理解することに努めることが大切だと考えます。また、多くの保護者や地域住民が子どもたちの教育に関わることが大切だと考えます。

さらに、誰もが安心して通える学校は、教員にとっても、疲れて学校に行くのが嫌になってしまう学校でなく、大変だけど行きたくなる学校だと考えます。そのためには、教員一人一人の声が学校全体の教育に活かされ、働きがいを感じられることが大切だと考えます。そして、そういう学校運営は、教育委員会の采配によって、町田市内のすべての小中学校で実現可能だと考えます。

【請願項目】

1. 誰もが安心して通える学校にするために、次の2点の実施を求めます。

- ①教職員がお互いに信頼して相談し、支え合って、ありのままの子どもの気持ちを理解し、子どもに寄り添って一緒に考える姿勢で、子どもと対話できる環境をつくること
- ②そのために、すべての教職員どうしが本音で子どもに関する意見を交換できる環境をつくること

2. 子どもたちが温かい人間関係を体験できるように、保護者や地域住民が学校の教育活動に協力できる機会を、可能な限り増やすこと求めます。